



高知大学 vs 福岡大学

夏の大学 No.1 決定戦



高知大学、福岡大学のどちらが勝っても、
過去32回で関東、関西以外の大学が優勝するのは初めてとなる。
そんな歴史的な戦いを
「選手の色」「サッカースタイル」「主将」「マネジメント」「応援団」の
5つから比較し、独特の大学の魅力を明らかにする。

■「学生中心」

高知大の選手たちは、いい意味で学年関係なく仲が良く、団結力がある。それは、野地監督が考える「自立」を学生一人ひとりが考え、行動しているからであろう。ピッチ外での自己管理を大切にし、プレーでも基礎を大切に。その上で、学生が中心となりサッカーに取り組んできた積み重ねが、ファイナリストという結果につながったのではないだろうか。

「ノリの良さは負けません」という声も聞こえるほど、決勝戦に臨むチーム内のムードは良く、優勝を決め、最高のモチベーションでよさこい祭りに臨むことができるかに注目したい。

選手の色

VS

「キズナ」

約110人の個性豊かな選手がまとまることができる理由は、福岡大サッカー部で共に苦しい練習に耐えてきた仲間という「キズナ」の強さではないか。「チームを一つにするために走る」という宮路主将の言葉通り、週一のオフの後の2部練習や、毎日のフィジカルトレーニングにも耐えてきた。自ら何に取り組むか考えて実行し、仲間と切磋琢磨しあってチームとして成長した。

フィールドで戦う選手も応援団もスタッフも、この総理大臣杯の決勝戦へたどり着いたことには満足していない。福岡大の目にはもう日本一しか見えていない。

■「優先順位を考えたポゼッション」

今年の高知大は細かいプレーができる選手が多い。「DFラインからしっかりとしたビルドアップが出来るかが大事だ」と中野主将は語る。前線の布施、高木に香川ら中盤の選手が絡んで得点を狙いたいところだ。

また、スーパーサブトリオとして総理大臣杯でも大きく活躍している、中村、永瀬、大西が交代でスイッチを変えてくれれば、たとえ点を取られようとも逆転する可能性は大いに期待できる。

「チームは大会中にも大きく成長している。平常心で戦えるかが勝敗の分かれ目」と野地監督が話すように、初の決勝の舞台上で選手が自分のプレーを存分に発揮してくれることを期待したい。

サッカースタイル

VS

「3m 3秒 3人目」

乾監督の3つのコンセプトである。「3m」とは、守備のアプローチの距離。ファーストDFがどれだけパスコースを限定し、プレスが掛けられるか。「3秒」とは、切り替えの早さ。守から攻の切り替えで永井が空いていたら、取って3秒で得点が決まる。「3人目」とは、出し手と受け手だけでなく、3人目がどうかかわっていくかが大切。

守備型のチームから永井選手の良さを活かすサッカーに転換し、完成形に近付いている。「永井には4試合連続ゴールで優勝がノルマ」という言葉から、乾監督の永井選手への期待がうかがえる。

彼のスピードが決勝戦でも勝負を決めてしまうのか。



■「自分たちのサッカーを楽しむ」

J2愛媛へ特別強化指定選手としての受け入れが決まった中野主将は、自分たちのサッカーを貫き通すことで、福岡大への勝機を見出す。

冷静な対応でボールを奪取し、今年度、高知大のコンセプトであるビルドアップの始点となる。また、積極果敢に攻撃に参加する姿は、さわやかな容姿と合わせて、観る者を魅了するだろう。福岡大の永井選手との攻防も決勝戦の見どころの一つである。

3試合で9得点の福岡大の攻撃をシャットアウトし、優勝カップを高々とかざすとき、彼が今大会のヒーローとなる。

主将

VS

「死ぬ気で戦う」

J2福岡の特別強化指定選手である宮路主将は、3年前もこの長居スタジアムのピッチで優勝をかけて戦った。結果、立命館大に惜敗したが、4回生となりその悔しさを胸に秘め、再びこのピッチに帰ってきた。

福岡大は、国際大会でも活躍している永井選手に注目が集まるが、宮路主将の的確なコーチングからのプレスが機能しているからこそ、チームの武器が活きている。「守備力ではどこにも負けない」と言い切った主将が、個性豊かな選手をまとめ、今年こそ総理大臣杯を福岡に持って帰る。その熱い闘志がひしひしと伝わってくる。



■「試合前の準備は絶対に怠らない」

高知大の坪井主務は、昨年、副務としてこの総理大臣杯で3位という結果をサポートした。

だが、今年はさらに上を目指すべくチームに力を注いでいる。監督からまた、大会運営側からの注意、連絡事項を選手にしっかりと理解させ、選手がプレー以外のところで不満をためさせないことを意識しているという。

また、上野コーチは昨年の卒業生であり主将であったことから、野地監督よりもっと近い立場で選手と接し、一人ひとりに目を向けて熱い指導を行っている。

「総理大臣杯は短期決戦であり、選手のコンディション管理が重要」と坪井主務が話すように、彼ら二人のサポートが勝敗のカギを握るのかもしれない。

マネジメント

VS

「裏方だがチームの一人」

「大変のほうが嬉しい。選手との信頼関係も厚く、どれだけ大変でも、選手が結果を出してくれることがやりがいにつながる」と野田主務が強く語るその裏側には、3年前の総理大臣杯決勝戦の舞台がある。

1年生のときに決勝戦まで連れて行ってもらった経験、立命大に敗れて準優勝という結果に終わった悔しさ、今年はそれ以上の想いを下の代にも伝えたい、その思いが野田主務を動かす原動力となるのではないかと。

主務とマネージャー合わせて二人という、福岡大サッカー部において、田中マネージャーが「縁の下の力持ちより、上から引っ張る」というように、フィールドの外には力強い美人二人がついている。

■「どこまでもついて行く」

「初の総理大臣杯決勝戦進出の勢いを、どのチームにも負けない団結力と熱い応援で後押しする」応援団をまとめる小池選手は、決勝戦にかけける思いを熱く語った。

高知大の団結力は、ただ仲がいいだけではなく、お互いに厳しいことを言い合い、学生中心でより高いレベルを目指して活動することである。そのため戦う気持ちはフィールドで戦う選手、スタッフ、応援団も全員が等しく持っている。テスト期間だがチームを日本一にするために高知大応援団はどこにでもついてゆく。

目の前にある頂点をつかむため、高知大は全員で戦う。

応援団

VS

「俺たちがついている」

博多の男なら気持ちを見せろ。この応援歌でチームは一体となり勝利をつかむ。

福岡大は選手と応援団がチームの勝ちも負けも共有している。今季の前期リーグで一敗したときには、トップチームだけでなく応援していた選手も共に罰走を行った。このことから、大会に取り組む姿勢はトップも応援団も変わらないことがうかがえる。また、総理大臣杯では一回戦からトップチームについていき、地元、関西のチームを上回る熱い応援を見せしてくれた。「決勝でも福岡大の誇りをかけて日本一の応援をします」と応援団長の岡田選手。恐れることはない。さあゆこう。

あと勝ったら何かします……（応援団 岡田選手より）。